

ヘンリー・フィールディングの小説

——『トム・ジョーンズ』の本質(IV-1)——

児玉啓介

1. はじめに

『トム・ジョーンズ』は1749年に出版され、イギリスの最初の長編小説と考えられ、全体のための芸術的統一を確保する計画に基づいて書かれ、健全で人間的な本である。

フィールディングはジョージ・リトルトン卿への献辞の中で次のように言っている。

「私が読者に期待したいのは、この作品の正にその入口で、全体の流れの中で、宗教と美德の教義に反するもの、上品さの最も厳密な諸規則と矛盾するもの、熟読する際に最も純真な眼さえ傷つけるものは何も発見しないということ。逆に、善良さと純真無垢を推薦することがこの作品の中での私の誠実な努力であったことを断言する。この正直な目的を私が達成したと考えてほしいし、実を言えば、この種の本の中で目的が最もよく達成されているようである。というのは実例は一種の絵であり、その絵の中で美德が、言わば、視覚の対象であり、あの美しさ(プラトンが美德の赤裸々な魅力の中にあると主張する美しさ)の考えで私達の心を打つからである。

人類の賞讃を受ける美德の美しさを提示するほかに、真実の関心が人々を美德の追究に向かわせるのだと強調することによって、美德のための人間的行為にもっと強い動機を与えようと私は試みた。この目的のために、罪を重ねることは、純真無垢と美德の確かな友である心のしっかりした内的慰めの損失の償いをするにはできないし、罪が私達の胸の中へ招き入れる恐怖と心配の悪と全然釣合いをとることはできないと私は証明して来た。そしてまた、このような修得はそれ自体一般的に価値はないし、修得の手段は下品で悪名高いだけでなく、よくてもせいぜい不確かであり、いつも危険にみちているということ。最後に、美德と純真無垢は無分別による以外にほとんど傷つくことはないし、この無分別だけが美德と純真無垢を裏切り、偽りと邪悪が広げる罠にかけるということを強く説く努力をして来た。私が教義としてもっと熱心に努力して来た教訓は最も成功しているようである。というのは善良な人を賢明にする方が邪悪な人を善良にするよりずっと易しいと信じるからである。

このような目的のために私の得意とする機知とユーモアを全部以下の作品の中で援用した。その中では人間を笑いとばして彼らの好きな諸愚と諸悪をしないように努力して来た。この善意の試みにどのくらい成功したかは率直な読者にまかせるが、ただ二つだけ願いがある。その一つは、この作品の中で完璧を期待しないこと。もう一つは作品のあちこちでメリット(価値)がなくてもそれを赦すこと。」

また、フィールディングは2巻1章（以下2-1と省略）で読者に次のようなことを希望している。

「この作品の中である章は短かく、ある章は長い、また期間がたった1日だったり、何年もだったりするが、一言で言うと、この物語がある時はじっとしているように思われたり、ある時は飛ぶように思われても、読者諸賢は驚かないでほしい。というのは私は実際著述の新しい領域の創始であり、私の好きなどんな法律でも自由に作ることができるからであるし、これらの法律を読者は信じて従ってほしいからである。」

更に、フィールディングは4-1でこの作品を「英雄的、歴史的、散文的詩」であり、「これは悲劇詩人によく知られ、十分実行されている手法である。というのは詩人は聴衆の心を主役登場のために準備させるからである」と言う。

最後に、フィールディングは5-1でこの作品を書き進めて行く中で、特別な理由をあてはめることはないが、「散文的、喜劇的、叙事詩的著述全体の中で守る必要のある規則として理由を書きとめるだけで十分である」と言っている。

以上フィールディングが『トム・ジョーンズ』を書く際の心構えまたは意図を紹介したが、この作品は全部で18巻196章1102ページから成っており、4回に分けて論究するが、今回(IV-1)は諸般の事情により53章269ページを対象とする。

2. 登場人物とその人となり

『トム・ジョーンズ』という作品の中に登場する主要な人物は全部でおおよそ55人であるが、今回はその中の12人を紹介する。

(1) トム・ジョーンズ

(a) オールワージー氏はある特別な用事でロンドンを3か月ぐらい留守していたが、ある晩遅く帰って来て妹と食事をして、自分の部屋にはいって、ベッドにはいろいろとして衣服をあけてみたら、シーツの間にスヤスヤ眠っている粗末な産着にくるまっている赤ん坊を見つけた。その赤ん坊は鮮やかな色合いをしていて、純真無垢の美しさを表わしていた。これがオールワージー氏とこの物語の主人公トム・ジョーンズとの運命的な出会いである(1-3)。

(b) オールワージー氏が妹のブリジットと家政婦のデボラを呼んで、デボラに赤ん坊の面倒を見るように頼んだ場面で、彼女が金切声で叫ぶ。

「オヤオヤ、かわいこちゃんね。かわいくて、おとなしくて、あいくるしいあかちゃん。こんなすてきなおとこのあかちゃん、みたことない」と(1-5)。

(c) オールワージー氏は名付け親になって可愛い捨て子に自分の名前のトーマスをつけて、育児室に1日に少なくとも1度は行ってトーマス(トム)を見て可愛がった(2-2)。

(d) オールワージー氏が妹婿であるキャプテン・ブリフィルと話をしている場面で、キャプテンは言う。

「あの散髪屋で、学校の先生のパートリッジ。あのパートリッジがあなたのベッドで見つかった」

た赤ん坊の父親ですよ」と。トムの父はパートリッジで母はジェニー・ジョーンズという噂になっているが、その噂の出どころは家政婦のウィルキンズであって、しかとした証拠はない(2-5)。

(e)ある日ジョーンズがあひる一羽とりんごを沢山盗んだことがばれるが、それらを自分で食べたのではなく、ジョージ・シーグリムにプレゼントしたのだった。というのはシーグリム一家が貧しくて困っているのを見るに見かねて、義侠心からしたまでのことだった。盗むといういわゆる罪の意識はなかったのであるが、すべての苦痛とすべての非難を彼だけが耐えることになった(3-1)。

(f)トムが盗みを働いたことで勇敢な少年、愉快な奴、正直者という称号を与えられた。トムのブラック・ジョージ(狩猟番)に対する振舞いが召使たちの間ではもてはやされた。というのはジョージは以前は鼻つまみであったが、オールワージー氏から追い出されると、いたる所で同情されたし、トム・ジョーンズの友情と勇敢さが最高の拍手で召使たち全部によって祝福されたのだった(3-3)。

(g)哲学者のスクエアと牧師のスワッカムがトムとブリフィルを比較する場面で、

トムは彼の主人であるスワッカムが近づいて来る時、帽子を脱いだり、礼をしたりすることをしょっちゅう忘れて、尊敬の態度を欠いているだけでなく、主人の教訓と実例に全く無頓着である。実に思慮のないわついた若者で、その態度にほとんど真面目さがないし、ましてや彼の表現には真面目さがないし、彼の仲間のブリフィルの真面目な振舞いを横柄に下品にあざ笑ったものである(3-3)。

(h)オールワージー氏の眼にはトムとブリフィル(氏の妹の息子即ち甥)と比較すると、トムは悪ふざけ、乱暴、注意力の足りなさによって、不運な少年に写る(3-7)。

(i)ジョーンズは今や20歳になり実にすばらしい若者になった。ブリフィル夫人は自分の息子よりジョーンズを可愛がり、彼を励ますことによって、日々ますます彼をすばらしいと思うようになっていたので、夫人に気のあるスワッカムもスクエアも、若いジョーンズを妬むようになっていく(4-5)。

(j)トムはソフィアに対してはほかの人に対してよりも高い尊敬の念をもって振舞ったが、それはやはり彼女の美しさ、運のよさ、センス、優しい態度があったからで、彼女の体には関心はなかった(4-5)。

(k)この若い紳士(ジョーンズ)はソフィアのいろいろな魅力を意識していないのではなかったし、彼女の美しさが大いに気に入っていたし、彼女のほかの資質も全部尊敬していたが、彼の心に深い印象を全然与えていなかったのである(4-6)。

(l)ジョージ・シーグリム、俗称ブラック・ジョージ(狩猟番)の5人の子供の2番目の娘であるモリーが16歳になるまで、彼女の美しさはトムに全然印象を与えなかった。彼女の体より美しさに愛情を感じていた。というのは若い女を誘惑することは、その身分がどんなに低くても、彼には非常に憎むべき罪に見えたからだし、モリーの父には善意を持っていたし、家族に

は同情していたし、真面目な考えを強く持っていたからである（4-6）。

(m)モリーとジョーンズの駆け引きは、モリーの方が一枚上であるのに、ジョーンズ自身は自分の方がうまいと思っている。というのは自分は世界で一番ハンサムな青年だと思っているからである（4-6）。

(n)彼はこの可哀相な女（モリー）の幸福も不幸も彼次第だと考えていた（4-6）。

(o)トムはモリーを捨てることもソフィアを裏切ることもできなかった。従って両方の罪のどちらかが彼をまさしく宿命に従わせたのであろう。その宿命とは彼の確かな運命として最初は予言されていたものだったが（4-6）。

(p)モリーが教会の境内で会衆と大乱闘をしている場面にたまたま出会った時、

トムは狂人のように叫び、胸をたたき、髪をかきむしり、地面を踏み鳴らし、関係者全部に対する最高の復讐を誓った。彼はコートを脱ぎ、それを彼女にかけてやり、彼の帽子を彼女の頭にかぶせ、ハンカチでできるだけきれいに彼女の顔から血をふきとった。そして、彼女を無事に連れ帰るために、召使いに鞍を取りに帰るように叫んだ（4-8）。

(q)ウェスタン氏とオールワージー氏の教区牧師のサプル氏とトムと一緒に夕食をとって、トムが特別の用事があると言って帰った場面で、ウェスタン氏が2回サプル氏に言う。

トムが確かにこのててなしご（モリーが生んだ子）の父親です、と（4-10）。

(r)トムがオールワージー氏に罪の告白をする場面で、

モリーが生んだ子の父は私です。あの可哀相な女に同情して下さい。もしこの場合何かの罪があるとすれば、それは専ら私の責任だと考えて下さいと言う（4-11）。

(s)オナー夫人がソフィアに話している場面で、夫人は言う。

「ジョーンズさんは一番ハンサムな青年であると誰でも言います」と（4-12）。

(t)哲学者スクェアとモリーの情事がトムにばれて、その場を彼が立ち去る前にモリーに言う。

「モリー、君の友人に忠実であれ、君の僕に対する不貞を赦すだけでなく、これからもできるだけのことをする」と（5-5）。

(u)モリーの不貞を知って、ジョーンズの愛は同情へと変ったが、それでもいろいろ考えて不安だった。しかしモリーの姉のベティーが親切にも次のことを教えてくれたので、ジョーンズの心の傷もいえた。実は、トムがモリーを知る前に、モリーにはウィル・バーンズという男がいて、モリーが生んだ赤ん坊はジョーンズがその父ということになっていたが、バーンズが父であるということ、更にジョーンズ自身はバーンズの友人の告白、モリー自身の告白によってこれをたしかめたこと、そして、ウィル・バーンズがモリーの愛を一人じめしていて、ジョーンズもスクェアも同じ犠牲者であったこと、などがわかった（5-6）。

(v)ジョーンズはモリーの秘密がわかって、全く安心したが、ソフィアについては心隠やかな状態どころか、最も激しく乱れていて、彼の心はすっかりあけ渡されて、ソフィアが彼の心を完全に奪ってしまった。だから彼は彼女を果てしない感情で愛し始めた（5-6）。

(w)オールワージー氏が死のベッドでジョーンズの手をとって言う。

「おまえの気質の中には善良さ、寛大さ、節操があるが、これに用心深さと宗教を加えれば、おまえはしあわせになる。というのは前の三つの性質はおまえをしあわせに価するものにするが、本当にしあわせにするのはあとの二つであるから」と（5-7）。

(x)ジョーンズは生来激しい動物的元気を持っていた（5-9）。

(2)オールワージー氏

(a)この王国の西部のサマーセットシアという地方に昔からオールワージー氏は住んでおり、自然も財産もお気に入りの人といってもよい紳士であった。というのはこの自然と財産が彼を一番祝福し、一番豊かにしているように思われたから。自然からは好ましい人物健全な体質、しっかりした理解力、慈悲深い心を引き出しており、財産からは郡で一番大きな領地の相続人ということになっていた。この紳士は若い頃立派な美しい女性と結婚し、ことのほか愛しており、彼女との間に3人の子供が生まれたが、3人共小さい頃なくなってしまった。同じく最愛の妻を不運にも埋葬することになったのは、この物語が始まる5年前だった。妻の死が彼にとってどんなにショックであっても、彼は分別の人、節操の人らしく耐えた。というのは自分自身をまだ結婚していると見なし、彼の妻が彼よりちょっと早く旅（やがて追いつく旅）に出たと考えていたし、二度と別れることのない場所で彼女にまた会うことを全然疑っていなかったからである。彼の感覚は隣人の一部の人たちに非難され、彼の宗教は別の人たちに、彼の真面目さは更に別の人たちに非難されたのだが（1-2）。

(b)オールワージー氏は善良な心を持ち、家族は一人もいなかった。正直者のように生き、借金は1シリングもなく、彼自身のもの以外は何も取らず、立派な家を持ち、隣人を心から歓迎してもてなし、貧しい人に慈善的で、病院を建てた（1-3）。

(c)1)トム・ジョーンズの(a)で述べたように、ある晩オールワージー氏は自分のベッドの中で赤ん坊を見つけるのだが、その時彼はその光景にびっくりしてしばらく立っていたが、彼の心の中の生来の善良な心が働いて、その憐れな子に対してすぐ同情を始めたのだった（1-3）。

(d)オールワージー氏は生きとし生ける者に一番多くの善をほどこすことによって、彼の造物主に一番受け入れてもらうにはどうしたらいいかを黙想している慈愛にみちた人間であった（1-4）。

(e)キャプテン・ブリフィルとオールワージー氏が生まれの卑しい子供について話している場面で、ブリフィルは言う。

「法律は生まれの卑しい子供を殺すことを積極的に認めていないが、そんな子供はつまらない人間の子供であると主張しているし、教会も同じように考えているし、よくてもせいぜい共和国で一番低い、一番恥ずべき身分に育てるべきだ」これに対してオールワージー氏は「両親がどんなに罪深くて、子供は確かに純真無垢である」と答えた（2-2）。

(f)上記と同じ場面で、オールワージー氏は「この可哀相な赤ん坊にも合法的に生まれた子供と同様に財産を準備する」という（2-2）。

(g)オールワージー氏は悪を公然と奨励はしないが、悪人自身の苦しみを個人的に和らげる秘

密の恩人であった。特にパートリッジ一家に対しては（2-6）。

(h)オールワージー氏はスワッカムがする鞭打ちの処罰に反対した（3-6）。

(i)オールワージー氏は物事を不利な点で見るのにせっかちではなかったし、世間の声には無頓着であった（3-7）。

(j)オールワージー氏は甥のブリフィルの美德のあらゆる外見を拡大鏡の端を通して見て、彼のすべての欠点をもう一方の端で見たので、彼の欠点にはほとんど気づかなかった（3-7）。

(k)フィールディングが読者に向かって言う。

「諸君の意図、否、諸君の行為が本質的に善であっても、それだけでは十分でない。その意図や行為が善に見えるように注意しなければならない。もし内側が決して美しくないなら、外側も美しくしなければならない。これは絶えず注意しなければならない。そうでないと悪意と妬みが内側を黒くするように注意するだろう。その結果オールワージー氏のような人の聡明さや善良さは内側を見抜くことができないし、内側にある美しいものを識別することができないだろう」（3-7）。

(l)オールワージー氏がトムsの病気見舞いに来ている場面で言う。

「過ぎてしまったことは全て赦して忘れるべきである。この事故を善用すれば、結局トムのための天罰ということになる」と（5-2）。

(3)ソフィア・ウェスタン嬢

(a)ソフィアの心はあらゆる点で体と同じであった。否、体が心からいくつもの魅力を借りていた。というのは彼女がほほえむと、気性の優しさがその栄光を顔一面に発散させていたからである。ソフィアがどんな精神的たしなみを自然から得たとしても、それは人工によって幾分改善され磨かれていた。というのは彼女は叔母のもとで教育されていたからである。叔母は非常に慎重な夫人で、世の中を十分知っており、若い頃宮廷あたりで生活して、数年前にそこをやめて田舎へ帰って来た。その叔母の話やしつけによってソフィアは完璧によく育てられていた。とはいっても習慣によってのみ、そして上流社会といわれるものの中で生活することによってのみ、得られる振舞いのゆとりが少し欠けていたが。それは純真無垢で十分うめあわされておられ、良識も生まれながら上品さも十分に備えている（6-2）。

(b)ソフィアがこの物語に登場したのは18歳で、オールワージー氏とウェスタン氏はしっかりした地位を築き、一緒に生活していたし、トムとブリフィルの幼い頃からの知り合いであり、年齢が同じぐらいで遊び友達であった。トムの気性の陽気さの方がブリフィルのクソまじめな性質よりソフィアには合っていた（4-3）。

(c)ソフィアはトムがなまけもので、考えが足りなくて、元気なはずらっ子だが、彼以外に誰も敵ではないと知っていた。これに対してブリフィルは用心深くて慎重で真面目な青年だと見抜いていた。ブリフィルは人間性に対して大きな名誉を与え、社会に対して最善を生み出す性格であったが、ソフィアはその反対に、トム・ジョーンズを尊敬し、ブリフィルを軽蔑した。それはソフィアが名誉と善の意味を知ってすぐのことだった（4-5）。

(d)ソフィアは最高の無邪気と慎しみ深さがあり、気性の快活さが目立っていた(4-5)。

(e)ソフィアはハープシコードを演奏するのが得意であり、音楽を最高に愛する女で、ヘンデルの音楽以外は喜んで演奏しなかったが、父の好みに合わせていろいろな曲を弾いた(4-5)。

(f)ソフィアの父の言葉は彼女にとって法律であった。スポーツ(ここでは狩猟)は全然楽しくなく、あまりに粗くて男性的なので、彼女の性質に合わなかった(4-8)。

(g)ジョーンズがソフィアを助けた場面で、ソフィアは優しさにみちあふれた顔で彼を見ないわけにいかなかったため、その優しさが彼女の心の中にもっと強い感情を表わしたが、その感情は第3の力強い感情(即ち愛)の助けなしに、感謝や憐憫の気持ちでも女の最も優しい胸の中に起こせないぐらいのものだった(4-13)。

(h)この事故(ソフィアが馬から落ちそうになったときジョーンズが助けたが、その時ジョーンズが左腕を折った事故)がソフィアに非常に強く作用したし、この時魅力的なソフィアはジョーンズの心に同様の印象を与えた。実を言うと、彼はそれ以前に彼女の抵抗できないいろいろな魅力に気づいていたのだった(4-13)。

(4)ブリジット・オールワージー嬢のちのキャプテン・ブリフィル夫人

(a)ブリジット夫人はオールワージー氏の一人の妹で、今30歳を過ぎた年頃、悪意のある者の意見では、オールドミス的称号を与えても不適當ではない年代を幾分過ぎていた。彼女は美人というよりよい性質をいろいろ持っていて、女性の間でも立派な女性と言われていた。彼女は美人でないことを嘆くどころかその完璧を軽蔑していたし、美人であるためにかえって失敗する何とか嬢よりも立派でないことを神に感謝していた。体はいろいろ魅力を持ち、行動は非常に慎重で、用心深さが彼女を守っていた。その用心深さのためにかえって男性にとっては近寄りがたいものがあった(1-2)。

(b)朝食の席で赤ん坊が紹介された場面で、問題(赤ん坊の発見)を善意にとり、そのどうしようもない小さな生き物に対してある程度の同情をほめかして、兄のオールワージー氏が行なった慈愛をほめたたえた。というのは彼女は美德と呼ばれるものに対しては多大の尊敬をいつも表わしていたから(1-4)。

(c)上記と同じ場面でオールワージー氏がその赤ん坊を育てる決心を表わす。

彼女は兄にはいつも従っていたし、彼の感情に反対することは滅多になかったし、男は頑固でわがままだということを見てとっていたが、いつも小さな声でこれを漏らし、多くても精々つぶやき程度で終わっていた(1-4)。

(d)しかし彼女の本心は違っていた。

彼女がその赤ん坊から引き出したものを可哀相な未知の母親に対して次の罵詈雑言と共にあびせかけた。厚かましい女、だらしない女、浮気な女、凶太い女、あばずれ、ばいた、などありとあらゆる呼び方をしたが、これは美德の舌が同性に恥辱をもたらす者への鞭打ちの決まり

(c)これに対してスクエアは答えた。言葉はその意味が先ず確立されるまで哲学的に議論する

っていて、ブリジット嬢が話しを始めるのを待っている。

というのは兄がいない時の彼女の感情はある時彼女が述べる感情と大いに違っているというのをデボラは知っていたからである。しかしブリジット嬢はその疑わしい状況を長びかせなかった。デボラ夫人の膝で眠っている赤ん坊をしばらくじっと見つめていてから、優しいキスをして、赤ん坊の可愛さと純真無垢をほめたたえた（1-5）。

(f)ブリジット嬢はその小さなガキを養子にするというオールワージー氏の考えは気粉れであり、悪の勤めだと思うが、人間のこっけいな気分はどうしようもないぐらい頑固だということを知っていたし、人間の性癖のもつ愚かさと不合理を知っていた（1-5）。

(g)ブリジット嬢は一番すばらしい上品な趣味をもつ女性であった（1-11）。

(h)キャプテン・ブリフィルとブリジット嬢（若くてすごく美人で美点を備え財産のある夫人）が結婚式をあげてから8か月して、夫人はすばらしい男の子を産んだが、産婆は臨月の1か月前に生まれたことを発見した（2-2）。

(i)オールワージー氏は妹に、もしよかったら、彼女の赤ん坊と小さなトミーと一緒に育てたらどうかと言った。これに対して彼女は少々不満ではあったが、同意した。というのは彼女は兄に対して本当に満足していたから。

そしてこの時からずっと、厳格な美德を備えた夫人が時々トムのような子供に見せる以上に親切にその捨て子に対して振舞った。……そんな子供は、どんなに純真無垢であっても、淫乱の生きた記念碑と実際に呼ばれるが（2-2）。

(5)哲学者のスクェア氏と神学者・牧師のスワッカム氏

(a)スクェア氏の天才は一流というものではなかったが、学識のある教育によってその天才を大いに改善したのだった。彼は古代ギリシヤ人・ローマ人の書を深く読み、プラトン・アリストテレスの全作品の自称巨匠であった。それに基づいて彼はある時プラトンの意見に従って、ある時はアリストテレスの意見に従って主として自分で大きなモデルを作った。教訓においては自称プラトニストであり、宗教においてはアリストテレスに傾いていた。また彼はプラトンをモデルにして彼の教訓を作ったが、アリストテレスの意見に完全に一致していた（3-3）。

(b)スクェア氏とスワッカム氏が出会うと必ず論争をした。というのは二人の主義は全く正反対だったから、スクェアは人間性はすべての美德の完成であり、悪徳は体の欠陥と同様に人間性から逸脱したものであると主張した。一方、スワッカムは人間の心は墮落以来恩寵によって純化されあがなわれるまでは、悪の巣窟以外の何物でもないと主張した。ただ一点だけで、二人の意見は一致した。即ち道德に関する議論の中で、善良さという言葉を決して言わなかった。スクェアの好きな言葉は美德の自然美であり、スワッカムの好きな言葉は恩寵の神の力であった。スクェアはすべての行為を正義の不変の規則と物事の永遠の適性によって測定した。スワッカムはすべての問題を権威によって決定したが、この決定をする際にいつも聖書と注釈者を利用した。そして話を終るとき、次の質問をした。即ちいかなる名誉も宗教と独立して存在しうるか（3-3）。

(c)ブリフィルはスクエアとスワッカム両者に対して自分を売り込む応対のうまさを16歳の時十分持っていた。スクエアについては彼はすべて美德であり、スワッカムについては彼はすべて宗教であった。二人がいる時、ブリフィルは深く沈黙していたので、二人はこれをブリフィルによいように、自分たちにもよいように解釈していた(3-5)。

(d)ブリフィルがソフィアの小鳥を空に逃がした場面で、

私がソフィア嬢の小鳥を手を持っていた時、可哀相にこの小鳥は自由を望んでいると思ったからだし、何かを閉じこめることに何か非常に残酷なものがあるといつも思っていたから。それは自然の法則に反するようだし、その法則によってあらゆるものが自由の権利を持っているし、いや、閉じこめることは非キリスト教徒的でさえある。なぜならそれはしてもらいたいことをすることではないから。とは言っても、その小鳥の最後の結果、即ち恐しい鷹に連れ去られたことを考えると逃がすべきではなかったのだが(4-3)。

(e)ブリフィルがトムの病氣見舞いの場面で、

この価値ある青年は彼に対する尊敬の念を告白し、彼の不運に対しても同様の懸念を表わしたが、彼がしばしばそれとなく言ったように、彼自身の性格の真面目さを汚さないように、親しくなることを注意深く避けていた。そのために彼は悪の交わりに対してソロモンが言う諺を絶えず口にしていた。それは彼がスワッカムほど無情というのではなかったからだし、彼はいつもトムの快復を希望していたからである。このことはこんな時に伯父によって示される比類のない善良さが絶対に見捨てられない者の中に影響を与えているに違いないからである。次のように言って話をおえた。ジョーンズ氏がこれから先何かいたずらをするようなことがあったら、彼の味方になってしゃべるようなことは一言も言わないだろう、と(5-2)。

(7)モリー・シーグリム

(a)モリーはジョージ・シーグリムの次女で、田舎では一番の美女と考えられていた(4-6)。

(b)モリーは一般的にはすてきな女と考えられていたし、実際にそうだったが、彼女の美しさは最も愛らしいというものではなかったし、女性らしさがほとんどなく、どちらかと言えば、男性にふさわしいものであった。というのは若さと血色のよい健やかさがかなりあったからである。

彼女の心も体ほど女性的ではなかった。体は背が高くて、たくましくて、心は大胆で、積極的だった。恐らく彼女の方がトムを好きだっただろう。だから彼女が彼の消極性に気づいた時、ますます積極的になった。要するに、彼女の方がジョーンズのあらゆる高潔の決心を征服したのだった(4-6)。

(c)トムの怪我が快復してモリーに会いに来て、トムがモリーとのつき合いをやめたいと言っている場面で、

モリーはちょっと黙っていてから、ワッと泣き出して次のように言う。

「こんな仕打ちがあなたの私に対する愛なのね。こんなに私を捨てるなんて。私をだめにして

しまったわ。何回、何回、誓ったの。私を決して捨てないって。男はみんなうそつきで、うそっぱちで、女に悪意をもっとすぐ飽きてくると私が言った時も、何回誓ったの…。私は生きていく限り、ほかの男性は決して愛せない。男性は皆つまらないもの。この辺で一番偉い郷土が私に明日結婚を申しこんでも、絶対に応じないわ。いいえ、あなたのおかげで男を全部憎むし軽蔑する（5-5）。

(d)スクエアとモリーの情事がばれて、トムがその場を去ったあと、

モリーは彼女の新しい恋人に対して沢山の優しさをそそぎかけ、彼女がジョーンズに言ったことすべてとジョーンズ自身をからかって、ジョーンズが彼女の体をもてあそんだけど、スクエア以外に誰も彼女の主人ではなかったと誓った（5-5）。

(8)ウェスタン氏

(a)彼はもし街に住んでいたら、音楽の玄人と思われたかも知れないほど大の音楽愛好家であって、ヘンデルの最高の作品にも異議を唱えたりしたが、娘のソフィアにはよくハーブシコードを弾かせた（4-5）。

(b)ウェスタン氏がトムの病気見舞いに来ている場面で、

「ソフィアが乗っていた馬は50ギニーでかって6歳だった」

「僕が1000ギニーでかって、あの馬を犬たちにたべさせましたよ」

「オヤオヤなんてことだ。あの馬がお前の腕を折ったからネ。お前は忘れて赦すべきだよ。物言わぬ動物に対して悪意を抱くより男らしいと私は思うけど」（5-2）。

(9)キャプテン・ブリフィル

(a)キャプテンは育ちのよい男のように結婚前にはいつも自分の意見を夫人の意見にゆずっていた。うぬぼれの強いのもというわけではなかったが、議論の際には目上の人に丁寧に負けながら、自分自身は正しいと考えていることを人に知ってもらいたいのである。彼は世界一うぬぼれの強い男だから（2-7）。

(b)キャプテンの妻に対する憎しみはより純粹なものだった。というのは彼女の知識や理解力の不完全さに関して、彼女が6フィートないことに対するのと同様に不完全さに対して彼女を軽蔑していなかったからである。彼の女性観はアリストテレス自身の不機嫌を上まわっていた。即ち彼は女性を家庭用の動物、猫よりは幾分高い思考力を持っている動物と見なしていた（2-7）。

(10)デボラ・ウィルキンズ夫人

(a)彼女はドレスに対して、そしてドレスを研究している夫人たちに対して最大の軽蔑をいつも表わしていた（1-4）。

(11)サプル氏

オールワージー氏の教区牧師で、性質はよく、価値ある男だったが、食事中無口であることで特に目立っていた。とは言っても彼の口は決して閉じていなかったが。要するに、彼は世界一立派な食欲を持っていた（4-10）。

このサプル氏は主要な登場人物の一覧表には、不思議なことに、でていない。

3. 主要な語とそのコンテクスト

(1)愛 (LoveとAffection)

(a)人はすべて生涯において一度は恋愛する運命にある。このために割当てられた特別の季節もない(1-2)。

運命にあたる語は'doomed'になっているが、これは通例悪い意味に用いられる。『トム・ジョーンズ』という作品を通じて考えても、悪い意味で恋愛する例はないようだが…。

(b)この季節の愛は人生の若い頃に時々現われるものより真面目でしっかりしたものである。女の子の愛は不確かで気まぐれで非常に馬鹿げているので若い女性が何を考えているかわからない。いや、若い女性がいつもこのことを自分で知っているかどうか疑わしい(1-2)。

愛という感情はどんなものであるか人間が一生かかって探し求めるものであろう。言葉だけで抽象的にわかっている、それでは具体的に示せと言われると、ちょっと戸惑うものではないだろうか。

(c)オールワージー氏とキャプテン・ブリフィルの弟の医者ブリフィルと話している場面でオールワージー氏が言う。

「愛は結婚生活の幸福の唯一の基礎である、というのは愛はこの結婚の接着剤であるべき高くて優しい友情を作り出すことができるからであると私はいつも考えて来た」(1-12)。

オールワージー氏は愛と友情と結婚の関係を考えている。

(d)作者がある夫婦について書いている場面で、

妻の容貌は気質の自然の優しさをあまり意味していなかったが、これは結婚の幸福を一般的に害するある状況によって幾分だめにされていたからであろう。というのは子供は愛の証拠とまさしく呼ばれるから。だが彼女の夫は結婚して9年になっても、彼女にそのような証拠は全然見せていなかった(2-3)。

結婚生活・夫婦生活の不可思議・愛情表現の上手下手、第3者になかなか理解できないものがある。

(e)作者がキャプテン・ブリフィル夫妻について述べている場面で。

理解に基づく愛(affection)は多くの賢い人によって考えられているように、美に基づく愛より長続きする、がこの夫婦の場合は逆であった(2-7)。

これは結婚の条件を考えさせる文である。即ちお互いに今まで知らない男女が結婚する時、外見を重視するか、お互いの心から出てくる理解を重視するかの問題である。

(f)キャプテン・ブリフィルがある日散歩中途中で倒れて死んでしまう。オールワージー氏のきもいりで記念碑が建てられることになるが、25行ある碑文の最後に、

彼(夫)の美德と彼女(妻)の愛情(AFFECTION)の記念碑(2-9)。

彼の美德と彼女の愛情とあるが、この表現は慣習的だろうか。なぜ2人の美德と2人の愛情

ではないのか。

(g)ジョーンズとモリーの愛の芽ばえる場面で。

彼女(モリー)の美しさがまだ(トムの)願いの対象であった。もっと大きな美しさがあるいはもっと新鮮な対象であっても。彼女が彼に対して明らかに持っていた愛情(affection)がある感情をつくり出し、彼が彼女にもたらず状況が同情をつくり出した。そして両方が、彼女の体に対する彼の願いとともに、激しい感情とは言わないまでも、愛(love)と呼んでよい感情を彼の中に育てあげた。とは言っても、その愛は最初は正しい所には置かれていなかったのだが(4-6)。

男女の愛が芽ばえる過程は、視覚的な美しさ、愛情(affection)、感謝、同情、パッション(激しい感情)、愛(love)の順序であると作者は言う。

(h)ソフィアがトムの病気見舞いをしている場面で。

ソフィアが自分の振舞いについて(トムに気づかれないように)細心の注意を払っていても、いくつかの表情が時々そっと現れるのを避けることができなかつた。というのは愛は次の点で病気に似ているかも知れない。即ち一方で押さえられると、もう一方で確かに突然出て来るものであるから。従って昏が隠すいものを、眼が、赤面が、沢山の小さな無意識の動作が、表わした(5-2)。

純真無垢の女性の男性に対する愛情の表現、振舞い、動作である。

(i)オナー夫人がトムの見舞いに来ている場面で。

オナー夫人は、真面目で有徳の心がすべての善に対して持っているあの同じ尊敬と慈愛で、ハンサムな男すべてを見た。ソクラテスが人類の恋人(lover)であったように、彼女は男の恋人と呼ばれてよい。というのはソクラテスが精神的資格のために人類を好んだように、彼女は肉体的資格のために男性を好んだから(5-4)。

これは今までと違う恋人(lover)の例であるが、真面目で有徳の心を持つ夫人が男性を見る時どのような見方をするかを考える手がかりを与えてくれる。

(j)ソフィアが父のウェスタン氏とトムのためにハープシコードを弾いている時、彼女の手にはめているマフが落ちて、それをウェスタン氏が暖炉の火の中に投げこんだのをソフィアがすぐ取り返した場面で、

これがトムに最大のショックを与えるが、ジョーンズの要塞は今や不意打ちをくらった。わが主人公はその心の大通りに見張りとして、軍事的知恵を使って、最近配置した名誉と慎重さのすべての考えたちがその持ち場から走って逃げたので、愛の神が意気揚々と行進してはいつて来た(5-4)。

これは比喩的表現であるが、要するに、この事件がきっかけとなって、ジョーンズがソフィアを愛し始めたということである。

(k)ソフィアに心を奪われると同時に可哀相なモリーについての心配がトムの心を悩まし困らせる場面で、

ソフィアのすぐれた長所が可哀相なモリーの美点すべてを全く奪った。いや、むしろ、消してしまったが、(モリーに対する)軽蔑の代わりに同情が愛に続いた(5-5)。

ジョーンズのモリーに対する愛が急に軽蔑に代ったのではなく、同情に代ったということである。

(l)上記と同じ場面でジョーンズはモリーについて苦悶するが、

可哀相なモリーの天才が勝利を得ているように思われた時、ソフィアの彼に対する愛が今やもう曖昧には見えなくなって、彼の心に突進して来て、心の前にあるあらゆる障害物を運び去ってしまった(5-5)。

これも比喩表現であるが、要するに、二人の愛の始まりである。

(m)モリーの不貞がわかったあと、ジョーンズはモリーを同情の点で見ようになり、彼の彼女に対する愛は彼に不安を与えるようなものではなかった(5-6)。

上記(k)と同様である。

(n)作者が愛について一般論を書いたあと、

ジョーンズの中の愛の明白な徴候にソフィアが気づいてウェスタン氏が気づかなかったことは、愛の考えが父の頭の中に決してはいらずに、娘は今やそのほかのことを何も考えていなかったことは全然不思議ではない(5-6)。

物ごとの気づき方についての1例である。

(o)ソフィアがジョーンズを本当に愛し始める、いや、恋し始める場面で、

ソフィアが可哀相なジョーンズを苦しめている激しい感情に十分満足し、自分自身がその対象であるとやはり確信した時、彼女は彼の現在の振舞いの本当の原因をいとも簡単に発見したのだった。このために彼女には彼がいとしくなって、どんな男の恋人も相手の女性の中に起こすことを望む一番よい愛情(affections)のふたつ、尊敬と憐みを彼女の心の中に起こしたのである。(中略)このようにして、彼の消極さ、彼の拒絶、彼の冷たさ、彼の沈黙が最も積極的で、最も勤勉で、最も温くて、最も能弁な擁護者であったし、彼女の分別ある優しい心に非常に激しく作用したので、彼女は有徳な高揚した女性の心と一致するあの優しい感情すべてを彼に対してまもなく感じた。要するに、尊敬と感謝と憐みが気持ちのよい男性に対して起こすことができるすべて、実際に一番すてきな優しさが許すことができるすべて(を感じたのだ)。一言で言うと、彼女は彼をむちゃくちゃに恋していたのだった(5-6)。

これはいわゆる心理描写であるが、愛から恋への過程を厳密に詳細に正確に描写している。女性が男性を愛する時、反対に、男性が女性を愛する時、大体このように心に変化して行くのだろう。

(p)オールワージー氏が急病になって、ジョーンズがウェスタン氏の家から急いで帰る場面で、オールワージー氏の危篤の知らせ(というのは召使いが彼はもう死ぬと言ったから)はジョーンズの頭から愛の考えを全部追い出した。彼は迎えに来た馬車にとびのって、御者に全速力で帰るよう命じた。途中ソフィアについての考えは一度も起こらなかった(5-7)。

愛は頭の中にあるものか。胸の中にはないものか。頭の中にあるものは理性ではないか。それはそうと、ジョーンズのあわてようを見ると、恋はまだまだ始まったばかりである。

(2)自然・本性 (Nature)

(a)フィールディングが『トム・ジョーンズ』を書き始める意図を料理にたとえて、

ここで準備した料理は「人間性」(Human Nature) という料理にはほかならない。(1-1)。

実際、本当の自然(true nature) (本性) はベイヨンのハムやポローニアのソーセージのように作家の中で出会うのは難しい(1-1)。

フィールディングが言う人間性や自然は純粋なものを意味している。人間性の場合人間が本来もっている純粋な性質、人工(art)にけがされない、よごされない純真無垢を言い、自然の場合も人工のにおいのしない、正に自然そのもの、あるがまま、そのままを意味している。

(b)オールワージー氏の家から見える情景

左手の情景はすばらしい公園の眺めを提供し、一様でない大地から成り、丘、芝生、森、水など賞賛すべき趣味と一緒に快く変化しているが、人工より自然の助けをかりていた(1-4)。

公園とか芝生は人工によるものであっても、恐らく自然を十分生かしたものであろう。

(c)スクェア氏とスワッカムが論争している場面で、

スクェアは人間性をすべての美德が完成されたものと主張した(3-3)。

すべての美德が完成されたものということは最高善を作者は考えているのかも知れない。

(d)作者はこの物語の中に全く誤りのない人物を登場させるつもりはないといい、

人間性の中に今まで見られなかったものは何も発見されない(3-5)。

という。肯定的に言いかえると、今まで見られたものがすべて発見されるということであり、善から悪まで、真から偽まで、美から醜までのすべてが見られるというのであろう。

(e)第4巻第1章で作者は主張する。

真実が自然の産物でなく病める頭脳の産物である怪物に満ちあふれるあの怠惰なロマンスと私達の著作を区別する(4-1)。

ロマンスとその作者に対する痛烈な批判であると同時に、自分の著作に対する自負心を強調したいのであろう。

(f)ヒロイン・ソフィアの登場の前口上として、

自然の顔から描くことができるあらゆる楽しいイメージで読者の心を満たすことによって、読者がヒロインを受け入れる心の準備をするのが適当だと私達は思っている(4-1)。

自然の顔とは上記(a)の説明で書いたように、純粋な顔、人工にけがされない顔のことである。

(g)上記と同じ前口上の中で

わがヒロインの絵は本当に自然からの写しである(4-1)。

この自然も文字通り自然そのもののことである。

(h)作者のヒロインについての弁明

彼女がどんな精神的才芸を自然から得たとしても、その才芸は人工（人為）によって幾分改善され教化されていたと言うので適当かも知れない。というのは彼女は叔母の世話のもとで教育されて来たからである（4-2）。

いくら自然がよいと言っても、当然それには限度がある。人為的美しき上品さはやはり人間には欠かせないものである。

(i)ブリフィルがソフィアの小鳥を可哀相に思って空に逃がした場面で、

何かを閉じ込めることには非常に残酷なものがあるといつも思っていたし、自然の法則に反しているように思われたから（4-3）。

スクェアがオールワージー氏に話しかける場面で、スクェアがブリフィルの言葉をもう一度引用する（4-4）。

理由はあらゆるものが自然の法則によって自由になる権利があると言うのである。

(j)これに対して牧師のスワッカムは言う。

自然の法則というのはちんぷんかんぷんの言葉であって、何も意味しない（4-4）と。

(k)更にこれに対してスクェアは反論する。

自然の法則がないならば、^{せい}正もないし邪もないと（4-4）。

(l)これに対してウェスタン氏が言う。

君たちの自然の法則なんてクソくらえだ。二人とも何を言っているのかわからん、正の邪のと。娘の小鳥をとったのは悪いことだったんだ、私の考えでは。お隣のオールワージーさんは好きなようにすればよい、しかし、こんなことで子供を励ますのは悪人に育てるようなものだと（4-4）。

要するに、三者三様自己主張だけするので議論がかみ合わないのである。これは考え方の違いだけでなく、議論というものの不毛または無意味を作者は強調したいのかも知れない。

(3)涙 (Tears)

人間は感動的な場面に出会うと、楽しくても悲しくても、いろんな場面に泣く動物ではないか。ワッと泣くか、さめざめと泣くか、ひとしづく涙を流すかの個人差はあっても。

(a)ある晩オールワージー家の夕食の時、散歩に出かけたキャプテン・ブリフィルの帰りがあまりに遅いのを心配して、

ブリフィル夫人が悲しみ嘆きながらワッと泣き出すと、しばらくしてオールワージー氏もワッと泣き出した（2-9）。

(b)この場面にブリフィル氏の遺体が運びこまれたのを見て、

オールワージー氏は涙を流し、ブリフィル夫人は泣きやむが、その代り大声をあげて泣き叫び、そのあとすぐ発作を起こして倒れてしまった（2-9）。

人間にとっていろんな別れがあるが、死の別れほど涙を伴う悲しいものはないだろう。

(c)オールワージー氏がトムに対して、私の疑いがおまえを誤解した。このためおまえがひど

い処罰を受けてすまないと謝った時、彼の寛大さに心を動かされて、

涙が彼の眼からワッとあふれた (3-2)。

(d) 狩猟番のパートリッチ^{いっ}一家がオールワージー^け一家から追い出されて貧しい生活をしているのを見るに見かねて、トムが馬を売ったと話す場面で、

涙が彼の頬を流れ落ちた。

トムの話聞いていたオールワージー氏が話を改める前に、

涙が彼の眼から流れ出した (3-9)。

(e) オールワージー氏がブラック・ジョージ (狩猟番) の妻に2ギニを与える場面で、その可哀相な女はこの気前のよさにワッと泣き出した (3-9)。

(f) ソフィアが可愛がっていたトミー (小鳥) の悲運を聞いて、ソフィアは涙の雨 (shower) を流した (4-3)。

(g) オールワージー氏がジョーンズに遺す財産について、ジョーンズが感激して「おお、友よ、父よ」と言ったあと、言葉が喉につかえて、

彼の眼から流れだしたひとつぶの涙を隠すために横を向いた (5-7)。

(h) オールワージー氏が死のベッドで遺言をしたあと、見舞いに来ていた人たちが別れる時、何人かは涙を流し、哲学者のスクエアさえも眼をふいた。ウィルキンズ夫人は、ほろりとする気分には慣れていなかったが、アラビアの木々が薬用の樹脂を落とすのと同じ速さで真珠を落とした。というのはこんな場合に淑女が必ずする儀式だったから (5-7)。

(i) オールワージー氏の病氣回復の兆が見えて来た場面で、

ブリフィルが落胆した様子で近づき、ハンカチを一方の眼にあてて涙をふいた (5-8)。

(j) オールワージー氏が妹のブリフィル夫人の死の知らせをブリフィルから聞いた時、心配と忍耐とあきらめの様子で、優しい涙をひとしずく落とし、顔を平静にして、最後に叫んだ「神の意志がすべてにおいてなされますように」と (5-8)。

(4) 賢い人 (賢人) (A Wise Man)

(a) 賢い人についての作者の考え方。

賢い人が自分で叫んだり嘆いたりしないからといって傷つかないのではないといつも結論できるわけではない。やはり女・子供の気質をもった人のように傷つくのだ (1-8)。

(b) 上記と同じように作者の考え。

真の英知と善良さをもった人は人や物ごとの不完全さを嘆かないで、それを改めようとしながら、人や物ごとをありのままにとることに満足している (1-8)。

(c) これも作者の考え。

人は誰も四六時中賢いわけではない、従って男の子が賢くないのは不思議ではない (3-4)。

(5) 心 (mind), 心 (heart), 気分 (spirits), 胸 (bosom), 魂 (soul), 願い (desire), 同情 (compassion), 憐憫の情 (pity), 苦悩 (agonies), 決心 (resolution), 注意 (attention), 感

情 (passions), 感情 (sensations), 考え (idea), 性質 (nature), 成分 (ingredients)。

(a)心 (mind) が痛みと病気によって和らげられ、危険によって不安を与えられる時、心の注意 (attention) が快樂を追求する際のあの激しい感情 (passions) でまごつかない時…；心 (mind) が全く墮落した人；彼女の気分 (spirits) が目に見えて動揺していたので…；すべてがソフィアの優しい胸 (bosom) の中でうまく行っているわけではなかった；このような考え (thoughts) がジョーンズを十分とりこにした時、彼の心 (mind) の中に騒ぎを引き起こした；彼の心 (heart) は今や秘密を十分表わした (5-2)。

(b)今やジョーンズの中に起ったもろもろの感情 (sensations) は非常に甘く爽快なものだったので、危険な結果よりむしろ心 (mind) の中に快い静けさを生み出したが、事実この種の感情 (sensations) は、どんなに爽快でも、非常に騒々しい性質 (nature) をもっており、それら (sensations) の中には睡眠剤のようなものはほとんどない。更にその感情 (sensations) はある情況と共にがくされ、その情況がもっと甘い成分 (ingredients) とまぜられているので、甘苦い (bitter-sweet) といった飲み物をつくっていた。その甘苦さほど味覚にとって不愉快なものはないし、隠喩的意味で、心 (mind) にとって有害なものはない。

その可哀相な女の破滅は必然的に彼女を捨てることになるのと彼は予見していたし、この考え (thought) が彼の魂 (soul) を突き刺した。

彼自身の心 (heart) は彼を愛し、その愛のために純真無垢を犠牲にした人間 (女) を破滅させることを許そうとしなかった。彼自身の善良な心 (heart) は彼女の原因を弁護した、冷い打算的な擁護者としてではなくその出来事に関心のあるものとして；そしてその心 (heart) そのものが彼女と同様にすべての苦悩 (agonies) を深く共有しているにちがいがなかった。

この力強い擁護者が、憐れな情況の中で可哀相なモリーを彩ることによって、ジョーンズの憐憫の情を十分引き起こした時、その擁護者はもうひとつの感情 (passion) の助けを巧妙に求めて、若さと健康と美しさの優しい色で女を表現した、そして彼女を願い (desire) の対象とし、少くとも善良な心 (mind) にとって、同情 (compassion) の対象とした。

このような考え (thoughts) の中で、可哀相なジョーンズは長い眠れぬ夜を過ごし、朝になってすべての結果はモリーを堅く守り、ソフィアのことにはもはや考えないことだった。

この高潔な決心 (resolution) で彼は翌日ずっと夕方までモリーの考え (idea) を大事にし、ソフィアを彼の考え (thoughts) から追い出し続けたが、宿命的夜につまらない事件が起って彼の激しい感情 (passions) はすべてまた揺れ動き、彼の心 (mind) をすっかり変えてしまった (5-3)。

人間が実際に何かをする時、必ず心の働き、意識の働き、五感の働きがある。その心の働きの結果は、小説家であれば小説、画家であれば絵画、音楽家であれば音楽、彫刻家であれば彫刻、建築家であれば建築物である。人間が具体的に作りあげた物または事はすべて心の働きの結果である。心とは意識であり、五感である。この心・意識・五感をもつ一人の人間、例えば、作家がその小説の中で人物を登場させる。人物が多くなればなるほど、人間関係が複雑になり、

その人物たちのお互いの心の作用がますます込め込んで来る。その複雑さを整然と技術的に、そして文学的に芸術的に描写するのが小説家であり芸術家である。

上記の例でもわかるように、わずか2章の中でも具体的に心 (mind, heart), 気分 (spirits) などが出てくる。たとえこれらの語がでて来ない所でも、作者フィールディングの心の働きの結果が『トム・ジョーンズ』という作品である。この作品は作者の心の働きの成果であるだけでなく、作者の人生観・人間観・価値観などに基づいて書かれたものであることは言うまでもない。作品の中の主要な語とそのコンテキストを観察すると、作者の意図するものが当然見えてくるのである。

4. 格言またはそれに類似した表現

(a)発見はすべてが出て来るまでめったに止まらない (3-9)。

(b)モリー・シーグリムに因んでコングリーブの言葉。

真の美しさの中には俗悪な魂の人が賞讃できない何かがある。どんな汚れもぼろも俗悪な特質を持たない魂の人からこの何かを隠すことはできない (4-6)。

(c)偉い人は、野心と虚栄心を自分のものとしてしていると想像していれば、だまされる。このような高貴な特質が田舎の教会や教会の境内で栄えている (4-7)。

これは教会関係者や教会に集まる人々の特質、特に悪い特質の表現である。

(d)オズボーンの言葉

女性の生まれつきの臆病は非常に大きいので、女性は神が作った生物全部の中で一番臆病である (4-13)。

(e)アリストテレスの言葉

男性の遠慮と忍耐は女性の中の美德と異なる。なぜなら女性にふさわしい忍耐は男性の中の臆病になり、男性にふさわしい遠慮は女性の中の生意気になる (4-13)。

(f)昼の美しさと夏の美しさは夜と冬の恐怖によって引き立つ (5-1)。

(g)思慮深い作家は対照の術を実にうまく駆使する (5-1)。

(h)作家は書いていながら、実際に眠りこむ (5-1)。

(i)トムがモリーの家に行き行って屋根裏にいるモリーに会う直前の描写

悲しみと喜びの極端は同じ効果を作り出すと言われて来たし、このどちらかが私達を不意に襲う時、全く困惑と当惑を作り出すので、私たちの能力は全部よく奪われてしまうものである (5-5)。

(j)モリーとスクェアの情事がばれた場面でスクェアが言う。

適合性は物ごとの自然によるのであって、慣習や形式や国内法によって支配されるのではない (5-5)。

実際不自然でないものは何も不適ではない (5-5)。

自分自身の評判を殺すことは一種の自殺であり、憎むべき嫌な悪徳である (5-5)。

人は誰も完璧に完璧ではない（5－5）。

自慢するのに適していない物ごとに行なうのに適していないかも知れない（5－5）。

非常に微細な状況が大きな変化を引き起こす（5－5）。

(k)オールワージー氏が死のベッドで言う言葉

不運が私達の友人に振りかかる時、私達はまさしく悲しいものである。というのは不運はしばしば避けられたかもしれない事故であり、ある人間の運命を他人の運命より更に特別不幸にするように思われる事故だからである。が、死は確かに避けられないし、あの共通の運命であるし、その点だけをすべての人の盛衰が決定する（5－7）。

(l)上記と同じ場面で、

死からのがれる人は赦されない。人は死刑の執行を猶予されているにすぎない。短い1日だけ猶予されているにすぎない（5－7）。

(m)上記と同じ場面で、

苦痛は同情より軽蔑を引き起こしがちである。特に仕事を持っている人の間で。というのは彼らには貧乏は能力の欠如を意味していから（5－7）。

(n)オールワージー氏の病状がそれほど悪くないとわかった場面で、

賢明な將軍は彼の敵の勢力がどんなに劣っていても、決して軽蔑しないように、賢明な医者には、病気がどんなにとるに足りないものであっても、決して軽蔑しない。前者は敵がそれほど弱くなくても、同じ厳格な訓練をし、同じ守備兵を置き、同じ偵察兵を雇うように、後者は同じ真面目な顔を保ち、同じ意味ありげな態度で顔を振り、病気を決してつまらないものにならない（5－8）。

(o)フィールディングの酒についての考え方

人が酔っぱらうと、性質が悪くなったり、喧嘩ずきになったりするが、そんな人は飲んでいない時は非常に価値ある人間であるという一般的観察ほど間違いやすいことはない、というのは酒は実際には性質を逆にしないし、以前に存在しなかった激しい感情を作り出したりはしないからである。酒は理性という警備員を連れ去り、結果的には無理に例の徴候を作り出すが、沢山の人は飲まないし、その徴候を隠す術を持っている（5－9）。

酒は私達のいろいろな感情（一般的には私達の心の中の最高のあの感情）を高め、火をつけるので、その結果、怒った気質、でれでれした気分、寛大さ、上機嫌、貪欲、その他もろもろの性質が、グラスを傾けるたびに、高められ、さらけ出されるのである（5－9）。

どんな国もイギリスほど沢山の酔っぱらいの喧嘩を、特に下層階級の中で作り出す国はない（というのは実際飲むことと喧嘩をすることは共にほとんど同意語であるから）ので、イギリス人は性質が一番悪い国民であると結論づけた人はない（5－9）。

恐らく栄光の愛だけがこの底流にあるのだろう。その結果、わが国の人々はどんなほかの平民よりもその愛を、勇敢さを持っていると結論を出してよいだろう。このことはむしろ、寛大でない、公正でない、たちの悪いどんなものもこのような場合には滅多に作用しない。否、喧

嘩をする者同志は喧嘩の時でもお互いのために善意を表わすのが普通だし、彼らの酔っぱらった上機嫌が喧嘩に終るように、その喧嘩の大部分は友情に終る（5-9）。

(p)ジョーンズとモリーが小川のほとりで出会って森の奥へは行っていった場面で、
運命の女神は物ごとを滅多に中途半端にはしない（5-10）。

5. 最上級表現とそのコンテクスト

(a)ジョージ・リトルトン卿への献辞の中でフィールディングは言う。

上品さの最も厳格な規則と一致しないものは何もないし、熟読すれば最も純潔な眼さえ傷つけるものは何もない。

(b)上記献辞の結びで作者は言う。

最高の尊敬と感謝の念をもって私は断言します。リトルトン卿さま、私は一番恩恵を受け一
番従順で一番身分の卑い召使いヘンリー・フィールディングです。

(c)作者が『トム・ジョーンズ』という作品を料理にたとえていうが、貴族の食物と玄関番の食物は同じでも味つけなど違うからうまいのだという。

亀の足が街で一番貧弱な店でも、言わば、さらしものになっている（1-1）

料理の仕方では一番おいしい食物なのにと作者はいいたいのである。

(d)上記と同じ場面で、

貴族の食物は一番気の抜けた食欲を挑発し刺激するのに対して、玄関番の食物は最も鋭い、
最も鋭敏な食欲を変質させて駄目にする（1-1）。

(e)作者の料理人についての言い分

私達は現代が生み出す最善の料理の最高の原理を厳密に守って来た（1-1）。

(f)キャプテン・ブリフィルのトム・ジョーンズのような私生児に対する考え方

よくても精々そんな子供（どこの馬の骨かわからない者の子供）はこの国の一番低い一番貧
弱な地位に育てるべきである（2-2）。

(g)ある学校教師パートリッジ氏について、

彼は世界で一番善良な男だった（2-3）。

(h)ジェニーがパートリッジ家から追い出された時のラテン語の英語訳

重荷は、よく運ぶ時、一番軽くなる（2-3）。

(i)人間性と陶磁器について

私たちが愛する人の生まれつきの欠点を矯正する試みほど愚かさの確かな特徴はない。人間性の最もすばらしい素質は、最もすばらしい陶磁器と同様に、その中に欠点を持っているかも知れないし、これはいずれの場合でも、同じように治すことはできないのではないかと思う、とはいっても、原型は依然として最高の価値をもっているのだが（2-7）。

(j)その計画は、偉大で高貴な計略をすべて推薦するのに役立つ二つの主要な中味を最上級で
持っていた（2-8）。

二つの主要な中味とは、一つは運命の女神の最高の悪意、即ちキャプテン、ブリフィルの卒中による死と、もう一つは建物のための最も高貴な材料即ちオールワージー氏の財産（をねらっていること）をさすが、作者が最上級という表現を使っていることに注目したい（2-8）。

(k)キャプテン・ブリフィルについて

彼は食事の時はいつも時間を一番厳守した（2-9）。

(l)トム・ジョーンズの友情と勇敢さ（盗んだ物をブラック・ジョージにプレゼントしたこと）は最高の拍手喝采で周囲の人に祝福された（3-5）。

(m)哲学者のスクェアと宗教家のスワッカムについて

2人の学者のうち前者は美德に、後者は宗教に関心を持っていたので、両者ともオールワージー氏との一番密接な同盟を考えていた（3-6）。

(n)スクェアのジョーンズに対する感情について

彼はわが可哀相な主人公に対して最も執念深い憎しみを抱いていた（3-4）。

(o)思慮深さと用心深さの必要性について

思慮深さと用心深さは人間の中で一番善良な人にとっても必要である（3-7）。

(p)牧師のサップル氏について

彼は世界一すばらしい食欲を持っていた（4-10）。

(q)ウェスタン氏とソフィアの関係について、

彼は彼女を非常に熱心に愛していたので、彼女に満足を与えることによって、大抵自分自身に最高の満足を与えた（4-10）。

(r)上記と同じ関係において、逆に

ソフィアは本当に父の可愛い子であったし、またそう呼ばれるに十分価した。というのは彼女は最も十分な態度で彼の愛情すべてのお返しをしたし、彼女はすべての物事において父に対する最も神聖な義務を果していたから（4-10）。

(s)オナー夫人とソフィアが話している場面で夫人が言う。

トムは私の人生で見た一番ハンサムな男性です。

確かにトムの肌は今まで見たうちで一番最も白いです。

トムは世界で一番白い手を持っています。そして世界で一番最も優しく、性質が一番最もよい男性です。

トムはマフ（ソフィアのもの）に何度も何度もキスをして、世界で一番きれいなマフだと言いました（4-14）。

(t)作品と作者と読者の関係について

恐らくこの巨大な作品の中で、作者が作品を構成する際に作者に最大の苦心を与える以上に、読者が熟読すれば、読者に快樂を与えない部分はないかもしれない（5-1）。

(u)世界一すてきな女性と引き立て役の関係について

世界一すてきな女性でもほかの種類的女性を見たことのない男性の眼には彼女の魅力のあら

ゆる恩恵を失うものだろうか(そうだ、たしかに)。女性自身はこのことを十分意識しているので引き立て役を得るのにみんな熱心である。否、女性は自分自身にとって引き立て役になるものだ。というのは私はバースで見たことがあるから(5-1)。

(v)宝石商について

彼は一番すばらしいブリリアントカットの宝石でも引き立て役を必要とすることを知っている(5-1)。

(w)パントマイムについて

演芸の中で一番すばらしいのがイギリスのパントマイムである(5-1)。

(x)作者の喜劇についての皮肉または風刺

喜劇は舞台の上で以前上演されたどんなものよりも確かに退屈であったし、真面目な芝居を構成している退屈の最上級によってのみ引き立たせることができた(5-1)。

ここでも最上級という表現を使っているが、要するに最も退屈なものということである。

(y)オールワージー氏がトムスの病気見舞いをしている場面で

彼はトムに以前の失敗を思い出させたが、それは最も隠やかな、最も優しい方法でだった(5-2)。

(z)スクエア氏がトムの見舞いの場面で言う。

このような不運を思い出して、不運は一番賢い人の身にふりかかるものだとすることを思い出すだけで十分だ。その痛み(骨折の痛み)はそんな事故の最悪の結果であるが、この世で一番卑しむべきことである(5-1)。

(aa)ウェスタン氏がソフィアを連れてトムの病気見舞いに来て、ソフィアがハーブシコードを弾いた時、一番楽しい音楽でトムを魅了した(5-2)。

(bb)上記と同じ場面で、ウェスタン氏がトムに言う。

もし判決(骨折事故)がウェスタン嬢を保護していれば、その判決は私の人生の一番しあわせな事故であるといつも思うだろう(5-2)。

(cc)オナー夫人がトムの病気見舞いの場面で言う。

たしかに彼女(モリー)は世界一善良な貴夫人です(5-4)。

(dd)マフの事件について形式的最上級(-est, most-)の表現でなく、内容的最上級(not~so~as~)の表現でする一節。

比類まれなソフィアの魅力全部が、彼女の眼のくらむような明るさと思い悩む優しさ全部が、彼女の声の調和体の調和が、彼女の機知、上機嫌、心の大きさ、性質の優しさを全部が、マフのこの小さな事件ほど可哀相なジョーンズの心を絶対に征服しとりこにできたわけではなかった(5-4)。

(ee)トムがソフィアとモリーのことで悩んでいて、モリーの言った言葉を思い出していた時

モリーはトムの約束を堅く信じているし、彼女が女性の中で一番しあわせになるか一番じめじめになるかはトムが約束を果たすか破るかによっていると断言したし、一人の人間を最上級の

悲惨に追いやる張本人になることは彼には一瞬たりとも反芻するにたえない考えであった（5-5）。

ここにもまた最上級の悲惨という表現が出てくるが、これも、簡単に言うと、最も悲惨な状態というぐらいの意味である。

(ff) スクェアとモリーの情事がばれた場面を作者は次のように描写する。

最も真面目な人々は真剣な瞑想の十分な食事のあと、デザートのもつり（美しい眺めが与える）楽しい考えにふけり、そのために本や絵は彼らの研究の最も個人的な休み時間へは行って行き、自然哲学の液体のようなある部分がしばしば彼らの会話の主題になる（5-5）。

(gg) 上記と同じ場面で作者はモリーについて次のように描写する。

モリーはこの証拠（情事がばれたこと）によって沈黙させられ、最も純粋な愛と節操のしかめつらしい、力強い断言と沢山の涙で彼女がこれまで主張して来た目標をいとも簡単にあきらめてしまった（5-5）。

(hh) 上記と同じ場面で

ジョーンズは3人の中で恐らく一番驚いたが、最初に口火を切った（5-5）。

(ii) ソフィアとジョーンズが散歩の時出会うソフィアの小鳥が逃げた場面をジョーンズが思い出して言う。

あなたが小鳥をなくした時感じた心配はあの冒険の中で一番大きな出来事であるように私はいつも見えます（5-6）。

(jj) オールワージー氏が死の床で、特にブリフィルに向かって言う言葉。

人間の出来事全部の中で（病気は）一番普通のことだから、そんなに悲しんではいけない（5-7）。

(kk) 上記と同じ場面で

人間の中で一番賢い人でも人生を（この世を）距離にたとえたとすれば、人生を1日として考えることが確かに許されるだろう。今夜去って行くのが私の宿命であるが、もっと早く連れて行かれる人は数時間を、どんなによくても、嘆くに値しない時間を失ったことになるし、労働と疲労の時間を、苦痛と悲しみの時間を、失ったにすぎない（5-7）。

(ll) 上記と同じ場面であるが、オールワージー氏が最も強調しているように思われる言葉。

人間の楽しみの中で一番長いものでも、どんなに短いことが、一番早くしりぞく人と一番遅くまで居る人との相違はどんなに実質のないものか。これは人生を一番よい見方で見ることであり、こんなにいやいやながら友人と別れることは一番好ましい動機となり、その動機から死の恐怖を得ることができるが、私たちが期待するこの種の一番長い楽しみでも、非常につまらない期間であるので、その楽しみは賢い人にとっては実に軽蔑すべきものである。だが、こんなふうに考える人はほとんどいない。というのは、人は死神にかみつかるまで、死のことをほとんど考えないから（5-7）。

(mm) オールワージー氏が死のベッドで家政婦に遺言をして、彼女が自分の部屋に帰ってか

ら言う言葉。

私は一番派手なガウンを買って、それを着て、頑固じじいの墓の上でダンスを踊りましょう。これが私のお礼よ（5-8）。

(nn) オールワージー氏の病気が回復して、主治医と一杯飲んでいる場面でのジョーンズの言動。

彼は生来激しい動物的な元気をもっていたので、この元気が酒の精に助けられて、一番奇抜な効果を生み出した。彼は医者にキスをし、最も情熱的な優しさで彼をだきしめ、オールワージー氏の次に彼を愛していると誓った（5-9）。

(oo) ジョーンズが主治医と飲んで酔っぱらってから森を散歩する場面で

木の葉を揺り動かすそよ風、さらさらと流れる小川の優しいささやき、ナイチンゲールたちの音楽のような鳴き声が全部一緒になって一番魅力的なハーモニーを作っていた。この場面で優しく愛がよみがえり、彼はいとしいソフィアのことを考えていた（5-10）。

(pp) ジョーンズが小川のほとりに寝そべってソフィアのことを考えている場面に

ガウンを着ないで、一番粗末で、一番清潔な格好とは程遠い、様子で、あるすばらしい香にぬれながら、一日の労働の産物であるモリー・シーグリムが、片手に熊手をもって、現れた（5-10）。

(qq) 上記と同じ場面で

二人はしばらく挨拶をかわしてから、森の一番奥には行って行った（5-10）。

(rr) ジョーンズがモリーと会っているところへ牧師のスワッカムとブリフィルがやって来て喧嘩を始めるが、

ジョーンズは一番弱い敵（ブリフィル）となぐり合いを始めて、彼を地面にたたきのめしてしまう（5-11）。

(ss) 上記と同じ場面で、

わが主人公はブリフィルを打ちのめしたあと、一番激しい勇敢さで敵（スワッカム）の攻撃を受け、彼の胸は一撃でドンと鳴り響いた（5-10）。

(tt) 上記のなぐり合いの場面が一転して仲なおりをして、ソフィアが父に家に帰るように言っている場面で、

ウェスタン氏は娘ソフィアの願いにすぐ応じた（というのは彼は世の親の中で一番優しかったからであった）（5-12）。

私たちがあつた事またはあつた物を最も強調したい時使うのが最上級表現である。小説であれば、登場人物が最も感動させられた人・物・事・状況・場面・景色などこれ以上表現できないと思つた時、その程度が極限の時に、最上級表現を使う、というよりは作者が最も強調したいことを作者の言葉によつて表現したり、あるいは登場人物や物や事を通して最高の言葉で表現したりする。それが最上級表現である。

最上級表現といつても、いつでも、どこでも、誰にでも、むやみやたらに、使つていいとい

うものではない。それこそ的確に、技巧的に、小説的に、文学的に、芸術的に、使用されねばならない。私達が日常生活の中でよく使う「サイコーだ」「サイテイだ」という言葉だけですすのはあまりに語彙が貧弱であり、ここでは論外である。要するに、感動の極限を形容詞または副詞で文法的に表現するのが最上級表現である。

上記実例は全部で41例であるが、(dd)は形容詞の最上級を使わない表現の例、(j)(x)(ee)は形容詞の最上級を使わないで、「最上級」という言葉を使った表現の例である。上記の実例の中の(II)だけをこれから問題にしたい。

(II)の例は英文ではわずか8行であり、その中に6つの最上級表現がある。

「人間の楽しみの中で一番長いもの」という時、「楽しみ」を具体的にどんなものと解釈するか。また「長い」を具体的な時間になおすと、何時間か何年か。日本は今まさにゴールデン・ウィークであり、休みの「長い」人は9連休という。この連休を「長い」と言うか短いと言うか。1か月の中の9日、1年の中の9日、10年の中の9日というように見方を変えれば、長いように見える連休も決して長くない。

「一番早くしりぞく人」とは、極端に言えば、生まれてすぐ死ぬ人のことであり、「一番遅くまで居る人」とは、極端に言えば、世界長寿記録を打ち立てる人のことである。長く生きる場合の中味または実質が問題である。120年は生きて時間的にはなるほど世界記録であっても、その人は、幸運にも、生物学的に医学的に長く生きたというだけである。その人の生き方を真似て、同じようにあるいはそれ以上に長い価値ある人生を生きた人はこの地球上にはまだいない。「長い」「早く」「遅く」「よい」「好ましい」ということは、要するに、個人的価値観の問題である。

「生きる」ということはただ「生きる」だけでなく「死ぬ」ことをいつも必ず内包している。「1日生きる」ということは「1日死に近づく」ことである。生きているけど死につつあるということである。「人は死神にかみつかれるまで、死のことをほとんど考えない」とオールワージー氏は言うが不治の病にかかって余命いくばくもないと医者に宣告されてから、死を考え、死の恐怖におびえるようでは遅すぎる。刻々と死は近づいていることをほとんどの人が気づかないし、意識していない。なぜ死に気づかないか、なぜ死を意識していないかという、死は経験できないことであるし、体験できないことであるからである。

6. まとめ

以上、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョーンズ』という作品の大体4分の1を読んで、実例を取り出し、少しの論評を加えて来た。作者の意図は宗教と美德、名誉と宗教、善良さと純真無垢、自然、人間性などを書くことであるが、全く誤りのない人物を登場させるつもりはないし、人間性の中に今まで見られなかったものは何も発見されないと言うし、善良な人を賢明にする方が邪悪な人を善良にするよりずっと易しいとも言う。

登場人物のオールワージー氏はその名が示す通り、全く価値のある人物であり、分別の人、

節操の人、生来善良な心を持っている人であるが、彼の欠点は物事を見る時、拡大鏡を使って見るような見方をする点である。

哲学者スクェアと宗教家スワッカムは会うと必ず論争するように、意見が全く対立するが、ただ一点で意見が一致する。即ち善良さという言葉を使わないこと、いや、作者が二人に言わせないことである。作者は善良さを書くと言いながら、この二人になぜ言わせないのか、これは意味深長である。当時の哲学者・宗教家に対して恐らく批判的だったのであろう。

この物語の主人公トムは捨て子として、女主人公のソフィアは非の打ちどころのない女として登場するが、二人の恋は今始まったばかりである。これから先、物語がどのように展開するか、二人の恋が、愛が、どのように発展するか優しく温かくかつ注意深く見守りたいと思う。

(1995年5月10日受理)